



「みたまのふゆ」とは、私共が常に蒙りいただいております大神様の恩徳、加護、御神威を尊称した言葉です。人間は自分ひとりの力で生きてゐるのではなく、つねに「みたまのふゆ」をいただいで、生かされてゐるのです。

御神号額

「正一位大山積神宮」について

瀬戸神社のご祭神(主祭神)は大山祇命です。日本書紀には「大山祇神」、古事記には「大山津見神」と表記され、風土記には「大山積神」と記されます。古事記では、奇稲田姫命の父神の足名槌は大山津見神の子と名乗り、また瓊瓊杵尊の妃となる木花之佐

を三段に斬り、大山祇神・雷神・高麗と成ったとされ、また別の一書では五段に斬ったのが大山祇・中山祇・麓山祇などの五山祇になったとあります。神話の神々は多様な表記方法や伝承が複合的に記録されてゐるのです。



瀬戸神社に伝来する神号額の最も古いものが「正一位大山積神宮」と記されたものです。この額の裏面には「延慶四年辛亥四月廿六日戌辰書之」の揮毫日付と「沙弥寂尹」の執筆者名の陰刻があります。

寂尹は藤原経尹(つねまさ)の出家した法名で、「徒然草」には勘解由小路二品禪門の表記で記録されてゐます(百六十段)。三蹟として書道の名人とされた藤原行成から十代目にあたり、書道の流儀は世尊寺流と呼ばれました。

古来、書道の達人として、「三筆」と「三蹟」が知られます。「三筆」は弘法大

(次ページにつづく)

令和六年祭事曆

- 一月 一日 歳旦祭
- 鶏鳴神事
- 二月 二三日 天長祭
- 三月 二〇日 春季大祭
- 祈年祭・合祀神例祭
- 四月 二九日 昭和祭
- 五月 十五日 例大祭
- 神社本廳献幣使参向
- 琵琶島弁天社へ神輿渡御
- 六月 三〇日 大祓式
- 大祓人形納め・茅の輪神事
- 七月 七日 天王祭出御祭
- 本社神輿御霊入・宮出渡御
- 七月 九日 三つ目神楽
- 無形文化財湯立て神楽
- 七月 一四日 天王祭巡幸祭
- 天王神輿町内巡幸
- 七月 二一日 手子神社例祭
- 九月 一日 浅間神社例祭
- 九月 一七日 熊野神社例祭
- 無形文化財湯立て神楽
- 一〇月 一三日 手子神社秋祭
- 無形文化財湯立て神楽
- 一二月 二三日 秋季大祭
- 新嘗祭
- 二月 八日 歳の市
- 開運熊手授与
- 二月 三一日 大祓式
- 大祓人形納め
- 毎月 一日 月次祭

師空海・橘逸勢・嵯峨天皇で、平安時代初期に活躍し、「三蹟」は小野道風・藤原佐理・藤原行成で平安時代中期の能書家となります。

「三筆」は空海・逸勢が入唐して学んだ唐様の書風を基本としたのに対し、平安中期の「三蹟」はこれを和様にした書風を定着させました。

行成の子孫は代々、朝廷の清書役をつとめる「能書の家」として書法故実を継承し、「世尊寺家」と称されました。

行成を初代とする系図を示すと、①行成―②行経―③伊房―④定実―⑤定信―⑥伊行―⑦伊経―⑧行能―⑨経朝―⑩経尹―⑪行房―⑫行尹とつづき、⑩経尹から⑪行房のころが鎌倉幕府の幕末期から南北朝時代で、行房は後醍醐天皇の隠岐遷幸に供奉もしてをります。

鎌倉時代になると、武家の素養としては単に弓馬の武芸にとどまらず、ことに將軍に近侍する者には「芸能」に秀でてゐることが必要とされ、蹴鞠や管弦とともに、「能書」「手跡」も重視されるやうになりました。

五代將軍頼朝のころは、九条家に縁のある法性寺様といふ書風が主流となりましたが、その後、次第に世尊寺流が坂東武士に好まれるやうになったといはれます。

その背景には、六代目伊行のころから、世尊寺家がたびたび関東に下向し、武家と交流を密にするやうになったことが伺えます。

ことに九代目の経朝は文永九年(一二二二)と同年の二度にわたり関東に下向し、北条時宗の信頼もあつく弘安の役の恩賞問題にも深く関はった安達泰盛に書写の口伝をしてゐます。鎌倉幕府の中樞の武士が世尊寺流の書法を学んでゐたのです。文永六年には蒙古・高麗に対しての返信文書を経朝が清書してをり、公家・武家に関わる外交文書にも携はつてゐたことが伺へます。

金沢文庫文書の金澤貞顕書状には、貞顕が父顕時の年忌法要のために諷誦願文の清書を経尹(すなわち寂尹)に依頼したことが見えてをり、貞顕は六波羅探題に在京中を含め、世尊寺経尹と親しく交流してゐたことが明らかです。

貞顕の六波羅探題在任は、正安四年(一二三〇)から嘉元二年(一二三〇)までと、延慶三年(一二三一)から翌年までの二度になりますが、神号額は二度目の在京時に「正一位」の神階とともに依頼したものでしてよいでせう。

「正一位」といふのは「神階」といって、神々に与へられた階位で、神威の高い諸国の神々に授けられました。伏見の稻荷が「正一位」となったので、全国に勧請された稻荷社も「正一位稻荷大明神」と称することも江戸時代ころまで広く行はれました。

藤原佐理の神号額も

瀬戸神社の本殿御扉上部の長押しに「日本總鎮守」の額が掲げられてゐます。参拝者からは見えにくい部分ですが、写真を掲載してをきます。

朝比奈町鎮座

熊野神社

社伝によれば、鎌倉に幕府を開いた源頼朝が、その東北の守りとして熊野三社をここに勧請したものとひまます。仁治二年(一二四一)、鎌倉幕府は朝比奈切通しの開鑿に全力を挙げ、執権北條泰時は自ら現場に臨んで工事を指揮しました。社殿の建立もこの頃行はれたこととせう。

その後、元禄八年(一六九五)、地頭加藤太郎左衛門尉良勝が神殿を再建してから、里人の崇敬を集め、相模国鎌倉郡峠村の鎮守として崇敬されてきました。安永及び嘉永年間には再度の修築も行はれて、明治六年村社に列しました。

昭和五十三年、氏子一同の熱意を集めて、入母屋造、総檜、銅板葺きの本殿を完成し、さらに平成御大典記念事業として新たな拜殿を建築竣功して今日に至つてゐます。

御祭神は速玉男命、伊邪那岐命、伊邪那美命の三柱です。

例祭日は九月十七日で、昔ながらの古式にのつとつた湯立神樂が今も続けられてゐます。

日本總鎮守

この額の筆者も「三蹟」の一人である藤原佐理です。

愛媛県大三島に鎮座する伊豫国の一宮である大山祇神社に藤原佐理が奉納したといふ額があり、時代は明確ではありませんが、その文字の写しの額が瀬戸神社に伝来したものです。

佐理がこの額を奉納した経緯については「大鏡」に物語があります。「大鏡」は、文徳天皇から後一条天皇の代までの天皇の事跡のほか、様々な事件や当時の重要人物の動向を大宅世継（おおよけのよつぎ）と夏山繁樹（なつやまのしげき）といふ百五十歳をこえるといふ二人の老翁が語る形式で表された歴史物語です。

藤原佐理は正暦二年（九九一）大宰大弐に任ぜられ、大宰府に赴任し、長徳

元年（九九五）に任を解かれて帰京します。「大鏡」に記されるのはこの帰京時のことです。

大宰府からの帰路は海路となりますが、伊豫国を前にして風波が激しく、いつまでも船を出すことができぬ日々が続きました。

ある夜、佐理の夢に気高い翁が現れて、「この嵐は我が起こしてゐる。どこの社にも額が掲げられてゐるが、我が社にないのは不都合だ。誰かに書かせたいが並の書き手ではよろしくない。おまえが通りかかったのが良い機会だから、嵐でとどめ置いてゐるのだ」と告げました。翁は三島の神であるとのことと、お引き受けしますと答へて目が覚めたところ、順風を得てたちまち大三島に到着したので精進潔斎をして装束も正装を着して書き上げ、神主を呼び出して神前に掲げたといふことです。

以後、海路は平穩で無事に帰京したとの物語になつてゐます。

佐理が揮毫したといふ額は、「日本總鎮守」「大山積大明神」と二行縦書きで、重要文化財に指定されて保存されてゐます。

大山祇神社に参拝すると、現在も鳥居には銅製の額が、また総門には彩色された額が掲げられてゐるのを拝することができます。

瀬戸神社の額は、「日本總鎮守」の五文字を横書きにして写したものとなつてゐます。

この「日本總鎮守」といふ御神徳の無邊なることを、日々の参拝の折にも体感していただければ有り難く存じます。

谷津町鎮座

浅間神社

谷津の町の鎮守として古来崇敬されてきました。伝説では御堂関白太政大臣藤原道長が当地に來遊し、能見堂から金沢の景勝を鑑賞したときに、正面の目の下にあるこんもりとした山を塗桶山と名付け、そこに浅間大神を勧請したといはれます。道長の来訪は史実ではありませんので、創建の詳細な時期は不明ですが、富士山信仰が関東一円に広まった中で当地にも勧請されたものでせう。ご祭神は富士山の浅間神社と同じ木花之佐久夜毘賣命です。特に安産の御利益があり婦人の崇敬が篤かったと伝へます。御祭神が天孫瓊瓊杵尊の御后となり、御子神等を出産されたことによるものでせう。

祭礼は六月一日の開山祭と九月一日の例祭。例祭（近くの土日曜）には谷津・東谷津・泥亀の各町内で神輿の巡幸その他のにぎやかな行事が営まれます。寛正四年（一四六三）西山松眠といふ医師が神饌田を奉納、以来、例祭には赤飯をお供へし、お下がりには崇敬者婦人が分けあつたといふことです。

瀬戸神社略縁起

大昔、今の泥亀町、大川町、釜利谷町小泉のあたりまで海が入りこみ、柳町や六浦町の塩場、南六浦、内川町内もすべて海でした。そして洲崎と瀬戸の間は、潮の干満時には急流が渦を巻き、容易に渡れぬ難所でした。古代人がここに海神を祀ったのが瀬戸神社の起源で、今から千五百年以上も前(古墳時代)のことです。

治承四年(一一八〇)鎌倉に入った源頼朝が、日頃崇敬する伊豆三島明神をこの靈域に遷祀してからは、六浦港の守り神「瀬戸三島大明神」として鎌倉幕府をはじめ上下の尊信をあつめ、その後、足利氏、小田原北条氏の崇敬も篤く、江戸時代には名勝金沢八景の中心にあつて、百石の社領を有する大社として、江戸の町民の間にも信仰者がひろがりました。

明治六年郷社に列格、戦後は宗教法人となり神奈川県神社廳勅幣使参向神社に指定。現在の社殿は寛政十二年の建造で、昭和四年の屋根を銅葺きに改め、平成二十四年には御屋根替へと修増築の御修営事業が行われました。社務所(淑月館)は令和の大禮記念事業として令和二年三月に竣工しました。

御祭神

大山祇(おほやまつみ)の命

伊豆国三島大社、伊予国大三島の大山祇神社の御祭神と同じ海上交通の神であると同時に、水源地を司る山の神であり、金属、岩石、木材などの建築資材や、森林、鳥獣に至るまで、一切の生活資源は、この大神の恩徳によるものです。

天孫瓊瓊杵尊の御后となられた木花咲耶姫の御父神にあられます。

須佐之男(すさのを)の命

配祀の神の須佐之男命は、天照大神の御弟神で、八俣の大蛇を退治された神話は有名です。自然界、人間界の罪けがれや悪者を追ひ祓ひ、人々の苦しみを除いてお守りくださる神様で、別名を「天王さま」と仰がれてゐます。

七月の天王祭りには大神輿で氏子町内をくまなく御巡りになります。

菅原朝臣道真公

天満大自在天神とも尊称し、一般には「天神さま」と親しまれて呼ばれます。書道、学問、詩文、和歌に秀でてをられただけでなく、至誠、尽忠、孝道、正義、国家鎮護の神さまでもいらっしゃいます。

日々のいのりを 大きないのりに

神棚には「氏神様」と

「神宮大麻」をお祀りします

神棚に地元の「氏神様」だけでなく、「神宮大麻」も併せてお祀りすることにはどんな意味があるのでしょうか。「神宮大麻」は伊勢の神宮のお札ですが、伊勢の神宮は皇祖天照大御神がご祭神であり、天皇陛下のお祈りのための神宮といふことができます。

「神宮大麻」にむかつて手を合はせる時は、陛下の祈りと同じ祈りをすることができのです。陛下の祈りは国民はもとより世界の平穩をも祈る大きな祈りです。

「家内安全」や「商売繁盛」「健康祈願」その他の個人的な小さな祈りも、大きな祈りに包まれて、天下のための「大きないのり」となり、神々のご嘉納も戴けるものとなりませう。



瀬戸神社 (☎三三六〇〇二七)

横浜市金沢区瀬戸十八一十四

(電話)〇四五七〇一一九九九二

(FAX)〇四五七〇一一九九九四

<http://www.setojinja.or.jp>

釜利谷町鎮座

手子神社

釜利谷町総鎮守の手子神社は、もとの地の領主伊丹左京亮が、文明五年(一四七三)瀬戸神社の御分霊を宮ヶ谷の地におまつりしたものです。

延宝七年(一六八〇)、伊丹氏の子孫、三河守昌家の子で、江戸浅草寺の智樂院忠蓮僧正が、現在地に遷祀して以来、釜利谷一郷の総鎮守として信仰をあつめて来ました。明治六年村社に列格、大正十二年の大震災で倒壊しましたが、同十五年再建し、昭和四十五年には御屋根も総銅板葺きに改修し、一段と御神威を加へました。

御祭神は瀬戸神社と同じく大山祇命、例祭日は七月十七日(現在はその後の日曜日)ですが、十月十五日(前後の日曜日)の秋祭りには、古式豊かな湯立神樂が昔ながらの伝統を守って行はれます。

境内の洞窟にお祀りする竹生島弁才天は、金沢八景のひとつ「小泉の夜雨」の中心地にあつたもので、厄除け、開運の福神として信仰されてゐます。